

【 190 】

氏名 河 合 岳 雄

学 位 (専攻分野の名称) 博 士 (医 学)

学 位 授 与 番 号 博 乙 第 2314 号

学 位 授 与 の 日 付 平 成 3 年 9 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者

(学位規則第4条第2項該当)

学 位 論 文 題 目 頸 髄 症 に お け る 振 動 覚 の 定 量 的 測 定 に つ い て

論 文 審 査 委 員 教 授 堀 泰 雄 教 授 寺 本 滋 教 授 折 田 薫 三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

振動周波数および振幅の増減が可能な振動覚測定器を試作し、健常人および手術的治療を行った頸髄症患者の術前術後の振動覚閾値を定量的に測定し比較検討した。症例は昭和61年3月より昭和63年11月までに当科において、手術的療法を行った頸部脊髓症状を呈する患者30例であった。

振動覚閾値の測定部位は、母、中、小指、および第1足指が適しており、加齢による上昇が認められた。頸椎症および後縦靱帯骨化症の両者とも、健常人に比べ有意に上昇していた。術後の振動覚の回復は、疾患別では後縦靱帯骨化症で、術式では脊柱管拡大術で、特に下肢において有意に認められた。振動覚の回復と、温痛触圧覚、運動覚の回復との間には相関を認めなかったが、識別覚との間には強い相関を認めた。日整会頸椎症性脊髓症治療成績判定基準では、振動覚は他の温痛触圧覚とともに同一レベルで論じられているが、両者の間に相関はなく、異なった範疇として評価する方が適切と考える。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は定量的測定法により、頸髄症患者における振動覚閾値の上昇と、術後の回復の状況をしらべ、とくに術後の回復は症例別では後縦靱帯硬化症で、また術式では脊柱管拡大術後に、さらに部位では下肢においてそれぞれ顕著であることを明らかにした。これは整形外科学領域で重要な新知見を加えたものであり、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。